

# 越境するエレガンス

—コム デ ギャルソンをめぐる魂の現象学の試み—

西 村 則 昭

魂とは、ひとそれぞれの個性や来歴とわかちがたくむすびついた、心の「機微」や「深み」のことである。そうした魂の存在に気づくとき、われわれの意識は、自我（現実世界を合理的・意志的に生きる主体）から、魂へとシフトする。そして魂の観点をもつようになった意識は、世界の魂（美）に開かれていく。魂の現象学とは、そうした人間と世界の両者の魂の現象に即して、そこにみられる論理をたしかな言葉へともたらそうとする試みである。本稿では、服飾という現象が扱われた。服飾とは、人間の魂と世界（服）の魂との相応・融合である。本稿では、とくに創造的なブランド、コム デ ギャルソンの心理学的な分析検討がおこなわれた。コム デ ギャルソンの創造性は、既成の意味の網目を慎重に、大胆に、巧妙に解き、意味以前の物自体、身体自体の次元に到って、そこにおいて創作をおこない、人間の存在を問いつつ、「エレガンス」の名に値する、新たなものを樹立することであることがわかった。その背後にはたらく元型的な力として、ギリシア神話の神々が、見通されえた。まずクロノスに言及され、その創造的にして保守的な特質、抑うつを惹起する邪悪な力が、どのようにコム デ ギャルソンの創造性と関連しているかが、論じられた。またコム デ ギャルソンの提示する異形のエレガンスの背後に、母親に捨てられた醜怪な子、プリアポスが、その母、アフロディーテにいとおしげに抱きしめられる様が、透見されえた。そして本稿では、ひとつの臨床事例が提示され、以上の論にもとづいて、その事例の理解が深められた。

キーワード：エレガンス、魂、創造性、元型的な力としてのギリシアの神々

## 1. はじめに

魂とはなにか。それはまず、他ならない私自身の心である。宇宙で唯一の「私」というものの存在の不可思議、神秘を思うとき、私は自らの魂に思いをめぐらせているのである。そうした魂の存在に目醒める主な契機となるのは、ひとを深く愛することや、死を思うほどの絶望など、自我（この現実世界を合理的・意志的に生きる主体）のコントロールの及ばない事態においてであろう。そうした事態において、われわれの意識は、自我から魂へとシフトする。われわれは自分や他者の個性や来歴を、魂の観点でとらえ、そこに「機微」や「深み」（想像的なもの、イメージ）をみいだすようになる。そうした機微や深みこそが、魂である。

そして自らの魂へとシフトした意識は、世界の魂（*anima mundi*, Hillman, 1993）に開かれていく。つまり、世界の美、機微や深みに対する感受性が高まり、自然の物にしる、人工の物にしる、ハッと息を吞ませるもの、胸躍らせるものを希求するようになる。そうした在り方は、芸術

家において、典型的にみいだされる。芸術家の創造的営みとは、世界や人生のなかに、未知の魂（＝イメージ）の胎動を発見し、その生成を促し、作品として明確な形に仕上げ、それを人々の共有の財産にすることである。

モード界でもまた、魂（＝イメージ）の探求、作品化がおこなわれている。そこでは新鮮な感性がたえずもとめられている。しかしながら、「モードはくりかえす」といわれるように、衣服においては、かならずしも未知の魂が創造されなくてもよい。過去のものであっても、それが現在、新鮮な輝きを放つならば、それはモードとなる。消費者の顔色をうかがわずにはいられないモードは、むしろ意外と保守的である。とはいえ、アヴァンギャルドな芸術家のように、既成の枠組みをこえて、未知の魂へと果敢に挑戦していこうとするデザイナーもいる。三十年代、シュルレアリスム運動と連動して、注目を浴びたデザイナー、エルザ・スキャパレリ（1890～1973）がいた。現在活躍する、もっとも創造的・芸術的なデザイナーとしては、コム デ ギャルソンの川久保玲の名が、まっさきに思い浮かぶ。

八一年、パリコレにデビューしたコム デ ギャルソンは、酷評にさらされた。墨染めの生地、穴があき、引き裂いたようなカッティングの服は、パリの伝統を重んじるひとの感性には、とうてい受け入れがたいものだった。しかしコム デ ギャルソンは、しだいに新しい感性をもとめるひとびとの、熱い共感のまなざしを集めるようになった。そうしたファンの期待にこたえるように、コム デ ギャルソンは毎年、パリコレで、さまざまな異端のスタイルをくりだしてきた。

「すでに見たものでなく、すでに繰り返されたことでなく、新しく発見すること、前に向かってのこと、自由で心躍ること」<sup>1)</sup>

これは九七年春、パリコレのためのDMに書かれた言葉である。これはコム デ ギャルソンの精神を端的に示しているように思われる。

川久保玲は、一九四二年、東京生まれ。慶応義塾大学で、美術史を専攻したのち、旭化成に就職する。三年で退社して、しばらくデザイン学校に通ったのち、フリーのスタイリストになる。一九七三年、株式会社「コム デ ギャルソン」設立。会社名に、自らの名をださなかったのは、会社にアイデンティティをもたせたかったからだという（スジック、1991、46頁）。会社自体が、一個の生命体として、創造をおこなうという意味の表明であろうか。川久保は、会社発足当初から、デザインだけでなく、経営も自ら管理していくことを目指した。

さて、おしゃれとは、すでに他所で論じたように（西村、2003）、モードの提供する服の魂と、それを「着こなす」人間の魂との相応・融合である。その相応・融合によって、魂としての「私」が現成する。未知の魂のこめられた、コム デ ギャルソンの服。そうした服の力を借りて、他ならない「私」のイメージ、アイデンティティが希求されるとき、そこにはどのような魂の論理がみいだされうるであろうか。これが本稿のテーマである。

ここで副題にある「現象学」ということについて、すこし説明しておきたい。現象学とは一応、眼前の現象をしっかりと見据え、体験の場に留まりつつ（したがって、主観の関与も含めて考えることになる）、そこにみいだされる論理をたしかな言葉にしていこうとする試みである。本稿の扱う現象は、服の魂、あるいは、服がひとに「着こなされる」ことによって、そこに現成する魂（主体の魂と服の魂の相応・融合したもの）である。そうした魂の現象は、主観を排除する近代自然科学の観点からは、とらえることができない。というのは、そうした魂の現象というものは、ハッと息を呑んだり、胸躍る体験、つまり主観の関与する体験のなかで、そこに留まることで、はじめて確保されうるものだからである。

ブランドには、その独自の傾向、気風、よくいわれる「テイスト」というものがある。「テイスト」、このあいまいな語こそ、実は、ひとつのブランドを、ひとりの人間のイメージ（人柄）のように、一個の存在にまとめあげるものとしての魂を、意味するものであるといえる。われわれは誰かのことを考えるとき、いかにもそのひとらしい容貌、言動、雰囲気を感じ浮かべるが、そのように、ひとつのブランドをイメージすることができなければ、そのブランドは「力」をもたないことになる。コム デ ギャルソンのテイストはなかでも強烈である。

本稿では、モードの既成の枠組みを越境し、破壊しつつ、エレガンスを希求する、コム デ ギャルソンのイマジネーションの在り方、魂の動き方、そしてそれを享受するひとの魂の在り方について論じられる。その際、私の日々の心理臨床における思考を規定している、元型心理学（archetypal psychology）の考え方が、とくに用いられることになる。

## 2. ニグレド

「ボロボロの原爆服。これはあなた方（読者）のための服ではありません。大急ぎで結んだボロ布、喪服を思わせる不吉な黒、青ざめたモデルの化粧。未来への悪い予兆を感じさせるボロ布のスノビズム……」<sup>2)</sup>

八三～八四年秋冬のコム デ ギャルソンのコレクションに対して、フランスの保守系紙フィガロは、以上のように評した。八一年、パリ・デビュー後の二、三年間、コム デ ギャルソンは、モード界の保守的な人々の反感を煽り立て、異端視され、酷評にさらされた。ロンドンのパンク・ファッションに、悪意をもってつなげた評もあった。とくにその「黒」は、不吉なものとして受け取られた。

保守的な人々の神経を逆撫でする、破壊的、地下世界的な黒。しかもそれが、キングスロード（パンク発祥の地）ではなく、モードの本場、発信地のパリで、素材や裁断にこだわり、エレガントなものとして、提示されることの意味とは。そして、それを纏うことで構成される「私」とは、どのような存在であるのか。

こうしたコム デ ギャルソンの黒は、心理学的にみて、どのようなものなのか。ここでユングの錬金術研究が想起される。往古の錬金術師たちは、「祈りかつ働け」をモットーに、神話的なイマジネーションをめぐらせながら、「金」を生成するためのさまざまな実験を、真摯にくりかえしていたが、ユングによれば、彼らはその作業によって、実は、自らの心の変容を無意識裡に意図していたというのである。謎めいた図版や言葉で表現される、物質の化学的変容のプロセスは、実は、錬金術師の心の変容のプロセスの投影されたものである。そうした作業において、段階的にあらわれる、魂の色彩というべきものがある。ニグレド（黒）、アルベド（白）、キトリニタス（黄色）、ルベド（赤）である。ニグレドは心の変容のはじまりをあらわす色彩なのである。

変容とは、安定した秩序を一旦、壊すことから始まる。Hillman (1997) はいう、「破壊こそ、黒の意図するところではないだろうか」(p.7)。ニグレドは、ユング心理学では、抑うつ状態と関連づけられるが、それは人生の再建、視野の拡張が必要とされている状態を意味する。自分の無知を思い知ること、愛する者との死別、悪に目醒めることなどで、われわれはニグレドの状態にはいる。これまで真実で現実のもの、堅固な事実、教義的な徳目として受け取ってきたものが瓦解する。そうして抑うつ的で、無為となって、自殺を思い、ネガティブ思考が頭のなかを空転するようになる。臨床家としては、そうした状態の患者に対して、薬物療法や、認知の歪み

を矯正する心理治療の有効性も、もちろん認めざるをえないにしても、そうした状態に留まることの意義もまた、かならずしも否定することはできない。Hillman (1997) は、そうした心の黒化 (blackening) の解体作用の肯定面を強調する。「黒化は目を暗くし、洗練させ、そうして見通す (see through) ことを可能にする」(p.8)。ここで「見通す」とは、自他の欺瞞、偽善を見抜く思春期的な、するどい「目」のことを考えてもいいだろう。不器用に自己主張してトラブルを招いたり、他者の言動に翻弄されたりして、暗澹とした気分になりながら、どこか醒めていて、次第に、しっかり人生や物事を見据える「目」が作られていく。それがニグレドに留まることの肯定面である。

このようにニグレドに留まって、ものの見方、とくにファッション美学を研ぎ澄ましていく、川久保の基本姿勢を表明するものとして、コム デ ギャルソンの黒をとらえることができるのではないと思われる (次節参照)。その黒が保守的な人々の目に、「死」を連想させる「不吉」なものに映ったのは、パリ・モードの既成の枠組みを破壊しようとする、ニグレドの「破壊的な意図」を、彼らが敏感に察知したからであるといえる。しかし堅固な伝統の枠組みと、自由な雰囲気とが共にあってこそ、破壊の美学は徹底的に追求されることができる。川久保にとって、パリはそのような場であったのだろう。

では、そのような黒によって、どのような「私」が構成されるというのであろうか。黒といっても、シャネルやアニエスbの黒は、都市の風景のなかによく溶けこみ、誰がみても「シック」で、誰が着ても大抵「エレガント」である。一方、コム デ ギャルソンの黒は、ニグレドとして破壊であり、はじまりを意味する。その「着こなし」は簡単ではない。まさに「格闘」しつつ、それを纏うことで、通常の「シック」とも「エレガント」とも違う、まだなにものにも縛られず、なにものにも属していない状態にある、いわば地上の現実から浮遊した「私」が構成される。そうした「私」が、不安でも不快でもなく、むしろ心地よく感じられるひと、たしかかなりアリティとして感じられるひとが、八〇年代から九〇年代はじめ、すくなくなかった。そうして川久保とコム デ ギャルソンは、過酷なモード商戦のなかを生き残っていったのである。

哲学者の鷺田清一 (1993) の好ましい短編エッセイ、「時代の喪に服すかのように」は、九二年四月、「もう、何もかも終わってしまった、という鬱鬱たる気分が最後まで通した」、コム デ ギャルソンのコレクションの様子を、的確に描写している。それは、ほとんどモノトーンのコレクションで、「傷だらけになったあとの完全に無防備な服、じっとたたずんでいるためだけの服、けだるさと悲しみに満ちた退嬰的な服」等々の連なりだった。BGMは、マリアンヌ・フェイスフルの歌で、その一節は、「世界がだんだん崩れていく／そこらじゅうに空が落ちてくる／どうだってかまわないわ／私は街では決して泣かないもの」(内田久美子訳) というものだった。終わる世界の絶望に彩られた風景のなか、凜として際立つ美しさのあることを、川久保はそのとき提示したのであった。それはいかにも、ニグレドに留まることから生成された、新たな装いの美であったといえようか。鷺田はいう、「破壊、解体、脱落。それが川久保玲によって、確実に《エレガンス》の目録に加えられたのだと思う」(135-6頁)。

### 3. クロノス

川久保は、現実生活のなかで、たえず「反発」を感じてきたという。

「もう永久に、幸いなことに続くんですね。そのたびに、怒って、エネルギーになっていると

いうことは言えます。日々、当たり前前に会社に来て仕事をして、当たり前前の生活なんですけれども、その中で、ひとつひとつ『そうじゃない』とか『それはおかしい』とか、そういうことが毎日一個や二個は必ずあります。また、そういうことを感じなかったら、つくれないと思うんですよ」<sup>3)</sup>

〇三～〇四年秋冬コレクションから帰国した川久保は、インタビューで次のように語った。

「万年鬱病なんですけどね、最近は何にひどいみたい。今は新しいものが評価されにくい時代。バイヤーもジャーナリストもクラシックなものばかりを見るようになっている。もうこの10年、ずっとそう」<sup>4)</sup>

以上の言葉から、地上の現実には馴染まず、いつも現実の抵抗を身に沁みて感じ、抑うつに悩まされつつも、反発を創作のエネルギーに換え、挑発的なコレクションをくりだす川久保の人物像がほの見えるだろう。既成の枠組みを越えようとする傾向が強いひとほど、現実の圧迫も強く受けることになるだろう。現実によって、魂本来の自由なイマジネーションの活動を阻止されて、魂が苦悩している状態。それを抑うつとっていいかもしれない。より自由な飛翔を希求する魂ほど、現実と抵触し、抑うつに陥りやすいといえようか。

ここで元型心理学の流儀にしたがって、こうした川久保の背後で「力」を揮う神々について、考えてみたい。ここでまずご登場願うのは、ギリシア神話のクロノスである。コム デ ギャルソンの黒い服などは、いかにも「クロノス的」と、私には感じられるのであるが、そんな私の直観を以下の論述によって、なんとか説明してみたいと思う。

ヘシオドスの『神統記』（廣川訳、1984）におけるクロノスのエピソードは、もっともよく知られたものである。それはゼウスの統治の成立するはるか以前のこと。ウラノス（天）とガイア（地）の「末っ子、悪智慧長けたクロノス、子供たちのなかでいちばん恐るべき者が生まれた、そして彼は強壯な父を憎んだ」。彼は、父ウラノスを大鎌で、去勢してしまう。そして彼が世界の統治者となる。しかし彼は、自分もまた子どもに覇権を奪われるのではないかと、不安にかられ、生まれてくる子どもたちを、次々と飲みこんでしまう。そのありさまを描いた、ゴヤの油彩画がある。それをみると、クロノスのすさまじく、醜悪な狂気のさまに圧倒される。物語では、やがてクロノスは、なんとか難をのがれた息子のゼウスによって、支配者の地位をおわれ、地底深く幽閉されることになる。

ユング派のエーリッヒ・ノイマン（1984）によれば、「父親殺し」は創造的な人間に課せられた宿命である。ここで「父親」とは、旧来の枠組みのことを意味する。創造のためには、それを打破しなければならない。その打破の行為が、「父親殺し」のイメージで内的に体験されるのである。ところで、クロノスの父親殺しの仕方は、去勢であった。そこには父権的な意識が端的にうかがわれる。というのも、フロイト理論のように、男根に最高の象徴的価値がみとめられているからである。しかしながら、クロノス自身は、父権意識を超えた存在である。というのも、クロノスは、父の去勢という行為に、政権交代、世界の革新という象徴的意味をもたせ、男性の生物的特徴をひとつの象徴（ファロス）へと始めて高め、父権意識を確立したといえるからである。そこには創造というものの真の在り方が、語られているように思われる。

つまりこういうことである。創造とは、単に意味の次元で、既にあるものとの差異を生成することによって、創作することではない。たとえば、モードで考えるならば、西洋の父権意識の下で形成された「女らしさ」の意味（それは、「（ファルスを）欠如した存在」であり、男性の「財産」であるというところから形成される）に留まっているかぎり、それは創造的ではない。「娼

婦」のイメージの露悪的な服で話題となった、ジャン・ポール・ゴルティエが、西洋の父権意識の下、「娼婦」として意味づけられるものに留まっているかぎり、その意味では創造的ではない。創造とはなにか。それは、既成の意味の網目を慎重に、大胆に、巧妙に解き、意味以前の物自体、身体自体の次元に到って、そこにおいて創作をおこない、新たな価値あるものを樹立することである。たとえば、九五～九六年秋冬のコム・デ・ギャルソン・オム・プリュスをみてみよう。坊主頭のモデルが、数字のはいった縦縞のパジャマふうの服を来て歩く姿は、西洋人には「アウシュビッツ」を連想させ、スキャンダルを惹起した。しかしながら、それらの服が、西洋の歴史の汚点、「アウシュビッツ」の意味に拘束された人々をしっかりと見返すだけの力をもっているならば、それらは「アウシュビッツ」の意味を超えて、「エレガンス」（ひとつの「価値」）の名に値する新たなものを志向している。すなわち、創造的である。

ブランド名の「男の子のように (comme des garçons)」とは、「自由」とか、「行動力」、「軽快さ」を印象づける言葉で、旧来の型に嵌った女性イメージの打破を含意するものであろうが、そこには、西洋の父権意識を相対化し、そこでの意味付けを拒み、およそ意味以前の服自体、身体自体のレベルで、繊細かつ大胆に、創造をおこなおうとする精神、すなわち、父に刃向かった息子クロノスの精神が隠されているように思われる。

クロノスは革新と保守の両極端の顔をもつ。革新性については以上に論じた。次に保守性について。創造的な人間に対して、現実が、頑迷な老人の顔で、神経質に、強硬に抵抗してくるとき、そこにはクロノスが顕現しているといえる。クロノスによって飲みこまれた子どもは、われわれのさまざまな生の可能性のことを意味すると考えられる。彼には、生の多様性といったものが、まったくみとめられない（多様性の実現した世界は、ゼウスによって確立される。次節参照）。彼は、子どもたちを消化し、同質化し、自らの体内に吸収し、融合しようとする。それは、ひとや物事を既成の枠組みに、強引に溶かしこもうとする体制の姿である。自分自身が生きている実感をとまなわれない、硬直した考え方や生き方を強いられた人々、彼らはクロノスの影響の下にある。彼らは抑うつにおちいりやすい。このような頑迷な保守主義としてのクロノスの意識をもった人々や、そうした人々が墨守している制度によって、創造的な人間は阻害され、抑圧されることになる。いやむしろ、創造的な人間にとって、地上の現実の物事はすべて、多少とも、頑迷な老人クロノスの顔をもつといえるだろう。そうして創造的な人間は、彼らが地上の現実には生きているかぎり、たえず抑圧され、抑うつに陥らざるをえなくなるのである。川久保の年来の抑うつは、このようにして生じたものと考えてみてはどうだろうか。

クロノスには、上の『神統記』とは異なる伝承が存在する。やはりヘシオドスが語っているが、それは『労働と日』（松平訳、1986）にみられる。その伝承とは、次のようなものである。太古、黄金の時代があった。この時代では、人間にとって労働の必要はなく、さまざまな産物がおいしげり、不正も争いもなかった。その時代の統治者が、クロノスであった。またクロノスは、後にゼウスに許され、「至福者の島」の王になったとも伝えられる。ひとの世から遠く離れたその楽園は、英雄の時代の選ばれた一部の者が、死後に住むことを許された場所であった。とくにこうしたクロノスの側面が、ローマ神話のサトゥルヌスとむすびついた。こうして、大鎌をふるって父を去勢し、子どもをのみこむクロノスの邪悪な側面をふくめて、サトゥルヌスの全体像ができあがったのである。彼は、陰うつな老人の姿で、図像に登場する。彼は、「夢見る老人」であり、「種撒くひと」であり、「水を撒き、植物を育てるひと」である。そして西洋占星術において、クロノス＝サトゥルヌスは土星と同一視された。西洋の象徴史において、サトゥルヌス＝土星は、

鉛をあらわすとされた。それは抑うつ「鈍重さ」をあらわす。クロノス＝サトゥルヌスの特性は、とくにイタリア・ルネサンスの思想家、マルシリオ・フィチーノによって、精密に描きだされた。フィチーノは、みずから慢性的に、抑うつを病んでいた。彼は、そのおのれの体験に根ざしつつ、占星術を実践的に研究した。彼は、占星術でいわれる土星＝サトゥルヌスについて、とことん思索を傾けたのであった。元型心理学では、こうした西洋の伝統、とくにフィチーノの考え方を重んじる。

すでに他処で論じたように（西村，2004），アフロディーテ（ウェヌス）は、われわれにとって、この世界をいろいろ、愛すべきものにし、われわれの美意識を育む。クロノス＝サトゥルヌスは、彼女とはまったく逆の仕方で、世界と人生にはたらく。サトゥルヌスの暴走は、たしかに破壊的であり、ひとを抑うつにおとし入れ、自殺にいたらしめることさえある。しかしこの神の力には、次にみていくように、魂をはぐくむ肯定的な側面も、また存在するのである。西洋錬金術においても、サトゥルヌスは、「腐敗」、「黒化」の過程を惹き起こすとされた。それは、魂の「乾燥」、「死」を意味する。ここで大切なことは、魂の「死」とは、魂の消滅、存在の欠如のことではないということである。すなわち、「死」の状態として、魂は存在するのである。だからこそ、その状態は、「再生」へとつながっていくのである。

元型心理学派のトマス・ムーア（2001）は、土星（サトゥルヌス）の強い影響力の下にあるひとが、どのようにしてその力に対処していったらいいか、フィチーノにしたがって、教えている。すなわち、土星とは反対の性質をもつものに、意識してかわりなさいという。たとえば、ハーヴのペパーミントや、白い服を着ることなどを、フィチーノは提案している。軽やかに今を楽しむことを心がけなさいというわけである。もちろん、現代においては、医者への指示にしたがって、薬物療法とか、認知行動療法に頼ることも、有効な場合がすくなくないだろう。しかしながら、その一方でムーアは、土星の邪悪な力、抑うつ、「死」を、徹底的に体験することの有効性もみとめている。サトゥルヌスのあたえる抑うつは、とかく現実適応に汲々とする自我の活動を抑止し、世界や人生についての瞑想へと心を転換する。それは、魂をみる目をひらき、魂に心を集中させ、ソウル・メイキングを、深いレベルで促すことになるのである。

ここで「不吉な黒」といわれたコム デ ギャルソンの服を思い浮かべてみよう。それは、抑うつという代価を払うことになるのかもしれないが、土星の邪悪な力を徹底的に体験することにおいて、意味以前の場に、自分自身の存在を見出し、頑迷な老人の顔で抵抗してくる現実をしっかりと見返し、そうして魂としての「私」をめぐる瞑想に、誠実に生きるひとのための服であることがわかる。

#### 4 多様性と異質性

コム デ ギャルソンの創造性についてもっと考えるために、ここでまた、クロノスのある伝承を取り上げることにする。それは、ペレキュデスの伝えるものであるが、あまり知られていない。廣川洋一（1979）が、ペレキュデスの現存断片および間接証言にもとづいて推定した物語は、大略、次のとおりである。

宇宙のはじまりにはザス（ゼウス）と、クロノスと、クトニエ（地）とがあった。クロノスとザスとが、おのおの世界を作り上げる。クロノスは、自らの種子から、火、空気、水の三元素をつくった。そして、五つの深い穴のなかで、これらの元素を、それぞれの割合で混合した。する

とそこから、五つの神の種族が生じた。一方、ザスは、クトニエと結婚することになったが、婚礼の際、ザスはクトニエに、大地（ゲー）の刺繍のはった外被を贈った。そのため、クトニエはゲーと呼ばれるようになった……。

廣川によれば、クロノスの作った世界は、残念ながら、具体的にどういうものだったかはわからないが、それが、「人間を寄せつけぬ、厳しく屹立した、無機的宇宙を思わせるだけでなく、本来人間とはまったく無縁な」（26頁）世界であったことは、推察できるという。「クトニエもその世界になんらかの働きをもつにしても、それはいまだ土的原理そのものである。このクトニエが私たちに親しい大地（ゲー）となったときはじめて、私たち人間がその歴史的生存を営むべき舞台としての、この世界が生成したという認識はきわめて重要である」（27頁）おそらくクトニエのゲーへの変容の後に、ふたりの性の営みによってオリュンポスの神々や人間たちが生まれたという展開があったのではないかと、廣川は推測している。

こうしたペレキュデスの世界創成神話を、心理学的に解釈してみたい。クロノスの五つの穴は、神々の生成される、いわば「錬金術師の容器」となっている。素材は、火、空気、水と、それらの容れられた地の四大元素であったと考えられる。穴は、前節にのべた抑うつ肯定面、すなわち、魂を育成する「容器」の側面をあらわしていると考えられる。というのも、depressionの語源のラテン語のdepressioは、もともと「窩」を意味するからである（田中編、1966）。抑うつとは、「穴に落ちてしまうこと」であるといったら、実感をもって、わかってくれるひともいることだろう。しかしながら、クロノスが独り身で、営々と、穴のなかで育成する神々は、廣川も指摘しているように、男女の性によって生みだされた、ゼウスの世界の住民とはちがって、無機的で、人間味を欠いた存在のようである。その存在は、ゼウスの世界、すなわち、この現実世界にすっかり慣れ親しんだ目には、なんとも名づけられようもなく、異様で、不気味かもしれない。

ここでさらに考えるために、「多様性（diversity）」と「異質性（disparity）」という対概念を用いることにしたい。それらは、唐突であるかもしれないが、現代の生物学者で、独自の進化論を提唱している、ステファン・J・グールド（1993）から借りてこられたものである。その進化論の妥当性について、私は論ずる資格はないが、その考え方は、本稿の議論に大いに寄与してくれるものであると、信じる者である。まずグールドの考え方を紹介しておこう。近代生物分類学の階層は、上位より、界、門、綱、目、科、属、種、というふうに分けられる。グールドによれば、「異質性」とは、異なった界、門、綱のレベルにおける差異性であり、「多様性」とは、目以下のレベルにおける差異性である。生物進化の黎明期、すなわち、古生代のカンブリア期、生命はまず異質性を増大させた。そして以後、生き残った界、門、綱のレベルで、多様性を展開させたのである。グールドがその論の拠り所になっているのは、カナダのバージェス頁岩で発見された、数々の奇妙奇天烈な、カンブリア期の古生物たちの化石である。そこには現生しない門が、十五から二〇も見出されたという（現生は三グループ）。また節足動物門の綱のグループだけでも、二、三〇も数えられるという。こうした異質性の増大の一大パロラマは、「バージェス劇」とよばれる。

多様性は、前節でのべた意味の次元での創作に対応し、異質性は、意味以前の次元での創造に対応するだろう。多様性とは、異質性がある程度、排除されて、安定した世界においていわれるものである。それは、心理学に敷衍されるならば、現実世界が安定している状態における、神々と人間の「個性」というべきものである。そう、多様性とは、ゼウスによって確立された、オリ



ウンボスの神殿を中心とする、神々と人間の世界の特性である。神々は、それぞれに個性的で、自らの得意分野をもち、また限界ももって、活動している。人間の個性は、そうした神々のさまざまな特性によって構成されると、元型心理学は考える。一方、異質性とは、世界がいまだ安定しておらず、多様性のレベルをこえた可能性に対して、開かれているときにいわれるものである。クロノスは、子どもに異質性を感じるからこそ、同質化する必要性にかりたてられ、飲みこみ、消化してしまおうとすると考えられる。もしも異質性が、安定した世界に出現してくるならば、それはその世界に揺さぶりをかけ、解体を促すものとなる。それは、心理学に敷衍されるならば、個々人の心が、お互いを排除しやすく、不穏な状況を構成するものである。そうした異質性の創造をペレキュデスは、語っているように思われる。

ここでコム デ ギャルソンの挑戦に目をむけてみよう。ユニークな素材の開発。ユニークな裁断が、動作や風によって生みだす、不定形な形。思い切った異素材の組み合わせ（たとえば、軽いキュプラと重々しいコージュロイ）。アンシンメトリー。服の部分の別の使用（たとえば、八八～八九年秋冬で、ラペルをスカーフとして利用した）など。通常の服の概念にはおさまらず、いかなる類型にも分類できない服たち。そう、ペレキュデスのクロノスの異様な被造物、あるいは、驚異の古代生物さながらの服たち。モードは、服の多様性が展開され、人間の個性の多様性の追求される場として、その内容が流動しつつも、その存在は安定しているものと思っているひとたちに、それらの服は、モードの存在、そして人間の存在に揺さぶりをかけるものとして、衝撃をあたえたと考えられる。川久保はいう、

「私の最終目標が、財産的な成功だったら、私はちがったやり方をしていただろう。しかし私はなにか新しいものを創りたい。私は人々に、異なった美学や価値観を示唆したい。私は人々の存在を問いたい」<sup>5)</sup>

モードにおいて人間の存在を問うこと、それが川久保の美学である。ヴァルター・ベンヤミン(1993)は、『パサージュ論』(B 1, 4)において、モードの根底に「死」をみた(それは、3節でのべた「土星」の特性であると、私には思われる)。ベンヤミンによれば、モードは、「死」との密やかな対話であり、「死」からの巧妙な逃避である。コム デ ギャルソンの創造的な仕事は、むしろ「死」に留まり、そこにエレガンスを見出そうとする、モードの存在論である。それが人間の存在を徹底的に問うものとなるのである。

ところで私事にわたって恐縮であるが、私は、コム デ ギャルソンの一ファンである。ある中学校で、カウンセラーをしていた頃(日本の教育の転換期にあって、スクールカウンセラーが試験的に導入されていた頃だった)、こんなことがあった。ごわごわ起毛した、濃紺の厚手のウール地の、コム デ ギャルソン・オムのジャケットを、私は着ていた。授業中、私は廊下を歩いていた。そのとき、ふたりの女子と出会った。教師の再三の指導にもかかわらず、教室にはいない、校則違反の派手な格好の女子である。私は生真面目に、「こんにち」とあいさつしたが、ふたりはよそをむいていた。私があるまふたりのかたわらを去ろうとしたとき、ひとりが私の背中にタワシを投げつけた。そのタワシの毛は、私のジャケットの背中に喰いこんで、そこに刺さった。ふたりの女子は大笑い。それが彼女たちなりの挨拶のように、私には感じられ、私は「また相談にきてね」といった。ふたりはカウンセラーの私に興味をもってくれ、しばしばカウンセリング室を訪ね、相談してくれるようになった。

当時、スクールカウンセラーとは、学校現場において「指導」から離れた、いささか異質な存在であった(学校現場の閉鎖性を打ち破る存在ということで、スクールカウンセラーは、「黒船」

にたとえられたこともあった)。あのふたりも、学校のなかで、自らがなにか異質な存在として感じられ、精一杯強がって、派手な格好をしていたにちがいない。そんな彼女たちは、やはり学校社会に突然、出現した異質な存在であるカウンセラーというものに、親近性を感じてくれたように思われる。心まで管理しようとする「管理教育」の請負人ではない、なにか新しいものを感じさせる、スクールカウンセラーの異質性を効果的に示し、彼女たちに親近感を惹起したのが、コム デ ギャルソン・オムの、タワシが吸いつく、想像力あふれる生地ジャケットであったように思われる。

## 5. プリアポス

九七年春夏のコレクションは、久々、物議を醸しだすものとなった。「BODY MEETS DRESS, DRESS MEETS BODY」と題されたそのショーでは、羽毛パッドを肩や背中や腰にいれ、不定形のシルエットを作ったマヌカンたちが、次々と舞台にあらわれ、観客たちの度肝を抜いた。彼女たちの異形は、カジモド（ノートルダムのせむし男）にもたとえられた。川久保はそのコレクションに関して、次のように語っている、

「六〇年代や七〇年代のリヴィイヴァルを意味する、レトロに注目するひとたちがいる。また、たいへんトラディショナルな、クラシックな服、とても着やすい、われわれが『現実の』服と呼ぶもの、シンプルな服にこだわるひとたちもいる。私はこうしたカテゴリーのいずれにも属さないものを作り、前進したかった。座って、そうしたメッセージをどうやって伝えたらよいか考え、新しい考え方をみつけた。それは『身体は服になり、服は身体になる』というものだった」<sup>6)</sup>

観念的な発想から出発する、いかにも川久保らしい発言である。しかしながら、川久保はここでいったい、なにをいおうとしていたのであろうか。

美は、性的興奮に由来し、性器に到る目標の途上において生成されると、フロイト（1969）は語った。女性を「財産」とみなす父権意識において、女性の服とは、男性が彼女の肉体に到達する途上で、演出される美である。服は、隠しつつ、なかの肉体を暗示し、誘惑する。基本的に、そうした服飾観にたって、モードは展開されてきた。九七年春夏の川久保は、服を身体とみなし、身体（＝服）を露出させることで、そうしたモードの在り方を、根底から覆そうとするのである。

ここで西洋的な美、とくに服飾の官能的な美を構成する元型的な力を考えるならば、それは当然、アフロディーテである。さきにのべたヘシオドスの『神統記』において、アフロディーテは、切断されたウラノスの男根から誕生したと語られている。さきに論じたように、ウラノスの男根は、クロノスによって、父権意識の象徴（ファロス）へと高められたといえるが、このアフロディーテの誕生譚は、女性の官能的な魅力が、父権的な由来をもつことを暗示していると、読まれる。やはり西洋の心によって育成されたアフロディーテは、父権意識によって規定されているとみるべきである。一般的に、モードにはたらく美の女神は、そのようなアフロディーテであると考えられる。

ここで川久保の九七年春夏の仕事を考えると、アフロディーテに捨てられた彼女の息子、プリアポスのことが想起される（ボンヌフォワ編、2001）。禿頭で太鼓腹、こぶだらけの身体、そして巨大な男根をもったプリアポス。その奇形は、到底、アフロディーテの美的感性に、許容されるものではなかった。アフロディーテのプリアポスに対する拒絶の反応は、コム デ ギャルソンのあのパッドで身体を変形させたマヌカンの姿に、カジモドを連想したひとの反応と、基本的

に同じものであろう。しかし私はそこに、父権意識へのとらわれから解放され、一旦捨てた我が子プリアポスをいとおしげに抱く、変容したアフロディーテの姿をみる。

ローマ式庭園の神、プリアポスを、Hillman(1989)は、京都の日本庭園のなかで体験したという。Hillmanは、西洋の心理療法における人間主体の内面志向に、強い閉塞感をおぼえていたが、日本の庭の在り方が、そうした閉塞感を打破する道を示唆してくれているように思ったという。Hillmanは、中心がなく、散策するにつれ景色が変わる、日本庭園のなかにいて、魂につつまれている感覚 (*esse in anima*) を味わった。そして、剪定され、捻じ曲げられ枝に、錬金術と同様の「自然に反する仕事 (*opus contra naturaum*)」の実現をみた。それは「すべてがそこにある」、「岩は岩である」という体験だった。Hillmanはそこにプリアポスの顕現をみたのである。「... この神は自らを知るために、鏡を必要としない。というのは、彼の自己は完全に提示されているからである。彼の本性は、内部に隠されえない...」(p.75)。

プリアポスの男根は、父権意識の象徴(ファロス)でなく、それどころか、およそいかなる象徴でもなく、ただそこにそそり立つ一物である。それはいかなる意味付けも拒む。しかし、それは、素朴な「自然」ではなく、「自然に反する仕事」の産物として、存在する。そしてそれは、強烈なリアリティを放って、その存在を主張している。そんなプリアポスの姿に、あろうことか、アフロディーテが微笑みかける。そこで生成される美。九七年春夏のコム デ ギャルソンの異形のコレクションは、そうした美によって構成される「私」を提示しているように思われる。それは、自己を完全に提示しつつ、自らが何者であるかの一切の規定から免れ、ただ存在のリアリティを呼吸している「私」である。「私」は「私」である。

## 6. 事例

かつて私は、カウンセラーとして、コム デ ギャルソンの服が、心の救いになんらかの効果を果たしたと思われるケースを、たまたま担当することになった。そのクライアント、はなさんは、三十台にはいって、「自分の人生を立て直したい」と思い、主治医の紹介状をもって、カウンセリング室をおとずれた。主治医の診断は、「境界性人格障害」。はなさんは、とてもおしゃれで、コム デ ギャルソンが好きだった。彼女は、独身で、ひとり暮らしだった。彼女は、ときおり、ひどい抑うつにおそわれることがあったが、そんなときは、母の家(両親は離婚)にいき、身の世話を母に任せきって、寝てすごしていた。男友達は多かった。不安定で、どうしようもなくなり、ひとりではいられなくなることのある彼女は、複数の男性に手分けして、支えてもらっている格好だった。

カウンセリングは難航した。面接には、ふつつり来なくなったかと思うと、二、三ヶ月して、またひょこりあらわれるということが、くりかえされた。私のやり方を、「生ぬるい」と批判的になり、「男友達もこんなふうになっていた」と、怒りをぶつけてくることもあった。はなさんとの面接では、私の心はかき乱された。しかし静かに、深く、カウンセリングに取り組む時期もあった。はなさんは、自分の生きてきた道を、しみじみとふりかえた。

はなさんにとって、母親は、「マイペースの人」で、どこか冷たく感じられたとのこと。そのぶん彼女は、「お父さんっ子」だった。父は、事業を起こし、成功した人だった。はなさんが幼稚園の頃、父がだれかに、「男の子がほしかった」といっているのを、彼女は偶然聞いてしまい、ショックを受けた。小学校低学年の頃、両親が離婚。はなさんは、母と暮らすことになった。父

は再婚した。それから、はなさんは父とは、友達のようにつきあっていて、当然、再婚相手には、嫉妬した。小、中学校の頃は、静かで、勉強のできる子だった。高校の頃から、気持ちが不安定になりだした。絵や音楽の趣味で、なんとか気持ちを安定させ、そうして勉強に精神を集中し、難関大学に合格した。大学にはいると、芸術関係のサークル活動に没頭し、それまでとは打って変わって、活動的になった。

面接をはじめて二、三ヶ月後、はなさんがいうには、

「大学には、おもしろいひとがたくさんいた。サークルは楽しかった。ジャズ喫茶で、何時間も、友達としゃべっていた。その頃、私は、いつもTシャツとGパンといった、ラフな格好だった。まわりもそうだった。あの事件がおくるまでは.....。あの日、私はなにかで、父と喧嘩した。父の家から帰るとき、私は絶望的な気分だった。走ってくる自動車の前に、飛び込んでしまいそうだった。そんなとき、たまたま、サークルの先輩(男性)に遭った。私は、それまで男性にはガードが固いほうだった。でも、そのときは、破壊的な気分で、その先輩の車に乗った。そしてレイプに遭った.....。この出来事で私は、ヴァージニティの意味、女であることの意味を知った。しばらくして私は、女性問題のサークル活動に、熱心にかかわるようになった。それも半年と続かなかったけど」。

「レイプ」事件の直後の、混乱した精神状態に関しては、面接開始後二、三年して、ようやく語ってくれた、

「カウンセリングに来て、こうやって話してきて、私の人生が、映画をみるように、みえるようになった。でも、ぽっかり穴があいているところがある。それがあの事件。いま思うと、あれは父に対する復讐だったようだ。父のいちばん大切にしているもの、私を傷つけることで、父に復讐しようとしていたんだ。あの後、心のなかの溶岩が、一気に噴きだしたようだった。その頃のことは、ずっと忘れていたけど、最近、思いだされてきた。あの後、私はノートに、いっぱい言葉や絵をかきなぐっていた。右半分が男で、左半分が女の顔とか。そういえば、高校の頃も、そんなことをしていた。私の人生を記録したフィルムで、その部分だけ、何倍速かで録画されていて、再生しても速すぎて、そこになにが映っているか、よくみることができなかったけど、今、そのスピードに目が慣れてきたため、みることができるようになったって感じ。その頃、大学院の男子で、私のことを支えてくれるひとがいた。まったくプラトニックな関係だった。私は、そのひとに頼りきっていた。でも、そのひとは私の激しさに耐え切れなかったようだ。彼は、私のせいばかりじゃないだろうけど、突然、大学院をやめて、地方のお寺にこもった。ひとりのひとには、私は支えきれないから、複数のひとに支えてもらうのがよいと、そのとき悟った。それから私は、突然、おしゃれに目醒めた。それまでおしゃれには、あまり興味なかった私が、買い物症候群になってしまった。ブランドとか、よくわからなかった。でも、地下商店街で、たまたまコム デ ギャルソンに出遭って、とても気に入った。私の気持ちにぴったり合った。こんなふうという大袈裟かもしれないけれど、レイプによって失われてしまった自分を、その破壊的な感じの服が、取り戻してくれるように思われた。コム デ ギャルソンって、パリコレに出ているくらいは、雑誌かなにかで知っていたので、最初、てっきりフランスのメゾンだと思っていた。後になって、川久保玲さんのことを知った。とにかくそれは、私の人生において、ささやかながら、本当に幸福な出遭いであったと思う。その頃、大学に、お気に入りの教授がいた。私はギャルソンの服を着て、よくその教授の研究室をたずねた。おしゃれの分かるひとで、『その服いいねえ』とかいってくれた。私は、服をほめられると、とてもうれしかった。その先生のゼミにい

こうかとも思ったけど、私のやりたいこととちがうので、別の先生のゼミにした。それでも、先生は、私のことを娘のようにかわいがってくれた。父親のように、私は先生に甘えていた。父は、その地位にふさわしい、オーダーメイドのダークスーツを着ていた。でも、おしゃれにはあまり関心のないひとだった。父に会うとき、ギャルソン着ていったけど、父は『なんだ、それ』って(笑)。父からほしくても得られないものを私は、あの教授に求めていたように思う。

面接開始四年後、はなさんの父は、不治の病で他界した。その出来事がはなさんに惹き起こした動揺は、相当大的なものだった。彼女は、病院の治療の在り方に問題があったと思い、裁判に打ってでようとした(その現実検討を欠いた企ては、親戚縁者たちによって、押し留められた)。そうした動揺のなかで、彼女は次第に、父に対する「近親相姦願望」を自覚していった。はなさんは、病院側の「インフォームド・コンセント」に問題があったと思っていたが、その「インフォームド・コンセント」という言葉を面接でいおうとしたとき、「インセスト(近親相姦)・コンセプト」と言い間違った。フロイトのいうように、言い間違えは、無意識の願望のあらわれである。はなさんはいった、

「この前、アルバムの写真をみていたら、大学生の頃、父とふたりだけで旅行したときの写真がでてきた。奥さんいるのに、変でしょ。私はビキニ姿で、父と並んで写っていた。恋人同士みたいに(笑)。私は父に愛されたかった。私だけを愛してほしかった。私はずっと、父の男の子がほしかったという思いに、呪縛されてきた。でも、この頃、やっとその呪縛から解放されてきたように思う。ネイルアートしていると、女に生まれてよかったなあと思える。こんな私だから失うものも多かったけど、こんな私だから得られるものもあった」。

父を愛し、その父権的な考え方に深く傷ついてきたはなさん。そして自己破壊への衝動に駆り立てられ、さらに決定的なトラウマ(「レイプ」)を被ってしまったはなさん。しかし彼女は、絶望のどん底でかろうじて、生きていこうとする「私」を見出した。それは、何者であるとも規定できないが、たしかに凜として存在している「この私」というものではなかっただろうか。「私」は「私」である。そうした「私」を構成する素材として、コム デ ギャルソンの服があったようだ。そうした彼女を見守った父親的な教授のはたした役割も、もちろん小さくはなかっただろう。とはいっても、それからのはなさんは、苦悩の連続だった。そして彼女は、三十台になって、カウンセラーの援助を得ながら、激動の過去を整理し、また最愛の父の死に接して、激しい痛みとともに自分自身について熟考し、次第に「女性」としての自分自身を見出していった。彼女が自分自身において見出した「女性」とは、彼女にとって、自らの存在の「機微」や「深み」を意味するもの、すなわち、彼女の魂を意味するものではなかっただろうか。

## 註

- 1) 深井晃子監修, 2002, より引用.
- 2) 織田晃, 1996, 94頁, より引用.
- 3) 平川武治との対談より. ジャップ第二巻第六号, 1995, より引用.
- 4) ファッション週刊誌WWDジャパン March 31 vol.1183, より引用.
- 5) Frankel, 2001, p.158, より拙訳引用.
- 6) ibid, p.154 より拙訳引用.

## 参考文献

- ボンヌフォワ,Y.編,金光仁三郎他訳『世界神話大辞典』大修館書店,2001.
- Frankel,S.Visionaries Interviews with Fashion Designers. V&A Publications,London,2001.
- ヘシオドス, 広川洋一訳『神統記』岩波文庫, 1984.
- ヘシオドス, 松平千秋訳『労働と日』岩波文庫, 1986.
- ベンヤミン,W., 今西仁司, 三島憲一他訳『バサージュ論 I』岩波書店, 1993.
- Hillman,J.The Thought of the Heart and the Soul of the World. Spring Publications,Dallas,1982.
- Hillman,J.From Mirror to Window - Curing Psychoanalysis of its Narcissism.Spring:An Annual of Archetypal Psychology and Jungian Thought49,62-75.1989.
- Hillman,J.Re-visioning Psychology.,HarperPerennial, New York ,1992.
- Hillman,J.The Seduction of Black.Spring:An Annual of Archetypal Psychology and Jungian Thought 61.1-15,1997.
- 廣川洋一「最初期ギリシアにおける人間と自然」, 中村善也・松本仁助・岡道男編,『ギリシア・ローマの神と人間』, 1-35, 東海大学出版会, 1979.
- 深井晃子監修『ファッション 18世紀から現代まで』タッシュエン・ジャパン, 2002.
- フロイト,S.「性欲論三篇」『フロイト著作集5』人文書院, 1969.
- グールド,S.J., 渡辺政隆訳,『ワンダフル・ライフ バージェス頁岩と生物進化の物語』, 早川書房, 1993.
- ムーア,Th., 鏡リュウジ・青木聡訳,『内なる惑星 ルネサンスの心理占星術』青土社, 2001.
- 織田晃,『パリコレクション20』繊維新聞社, 1996.
- 西村則昭,「アニマ・ムンディとしてのモード 魂の現象学の試み」中部人間学会雑誌2, 掲載予定, 2003.
- ノイマン,E., 林道義訳,『意識の起源史 上下』紀伊國屋書店, 1984.
- スジック,D., 川駒芳子訳『川久保玲とコム デ ギャルソン』マガジンハウス, 1991.
- 田中秀央編『羅和辞典 増訂新版』研究社, 1966.
- ユング,C.G., 池田紘一・鎌田道生訳『心理学と錬金術』人文書院, 1976.
- 鷺田清一『最後のモード』人文書院, 1993.
- Wilcox,C.Radical Fashion. V&A Publications,London,2001.

Crossing the border in Elegance  
A trial of phenomenology on the soul around *comme des garçons*

Noriaki Nishimura

The soul is the "subtlety" or the "depth" of psyche, which is connected inseparably to the individuality or the life-history of each of us. When we find out the existence of such a soul, our consciousness is shifted from ego (the subject which acts with reason and will in the actual world) to soul. Then the consciousness with the perspective of soul comes to open to the soul (the beauty) of the world (*anima mundi*). Phenomenology on the soul is, based on the phenomena of both the soul of the world and ours, going to find the logic in them and bring it to clear language. In this article the phenomena of clothing ourselves was treated. In doing so, our souls correspond or coalesce with the souls of the clothes. In this article *comme des garçons*, one of the most creative fashion brand was examined psychologically. It turned out that the creativity of *comme des garçons* consisted in dissolving carefully, boldly and skillfully the semantic network which had been already made, approaching to the dimension of the thing itself or the body itself, and making the new things which deserved to "elegance" in the same dimension, asking the being of us. And several gods in Greek myth as the archetypal powers could be seen through in the background of the creativity of *comme des garçons*. First, Cronos was discussed. How Cronos's creative and conservative quality and his malicious power causing depression were related to the creativity of *comme des garçons* could be found. Second, Aphrodite and Priapos, her ugly and bizarre son, who had been abandoned by her, were discussed. Aphrodite, who was holding Priapos with her love, could be seen through in the background of the odd-looking elegance of the dress by *comme des garçons*. Then a clinical case of a woman suffering from borderline personality disorder was presented and considered on the basis of the above discussion.

Key Words : elegance, soul, creativity, Greek gods as archetypal powers